

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

中 村 宏

目 次

- 1) はじめに
- 2) 「現況」と「変化」
- 3) Where-got・where-gone 表
- 4) ローゼンとデコスターの論評
- 5) おわりに

1. は じ め に

1907年の秋に発生した恐慌は多くの金融機関と一般商工企業を倒産させ、アメリカ全土がパニック状況に陥ったとさえいわれている。その時、企業の信頼は根底からゆれ動き、信用制度は深刻な混乱状態に陥り、銀行は借主の商業的・財務的状态をこれまで以上に厳しく批判的に調査するようになったといわれている¹⁾。

このような社会経済環境の中で、貸借対照表監査の気運が軌道にのった。たとえば1908年、コロラド州デンバー市で開かれたアメリカ銀行協会 the American Banker's Association の定例会議で、信用情報委員会 the Committee on Credit Information が、公認会計士による監査証明を要請する構想を発表した。また、ニュージャージー州アトランティック市で開か

れたアメリカ会計士協会 the American Association of Public Accountants の講演で、ニューヨーク第四ナショナル銀行副社長キャノン (James G. Cannon) が「銀行と公認会計士」と題する講演の中で、公認会計士による監査の有用性を強調した²⁾。

いわゆる信用分析補強の気運高まる状況の中で、コール (W. M. Cole) は、一般産業の貸借対照表分析の過程で、

「貸借対照表に表示される取引の概要表」 Summary of Transactions as shown from Balance Sheet いわゆる Where-got・where-gone 表 (以下、「計算表」と略称) を提唱した³⁾。それは、貸借対照表の他には損益計算書さえも利用できないと仮定し⁴⁾、あるいは利用できるとしてもその利用とは関係なく⁵⁾、貸借対照表だけから作成される情報である。そして、それはこれまで多くの論者によって源初的な資金計算書として論評されてきたのである。

本小稿の目的は、かかる「計算表」が貸借対照表分析の過程で、いかなる役割を果たしたのか、かかる疑問の解明を通して、氏の資金計算書の理論とその歴史的意義を再考することにある。

- 1) J. T. Anyon, Safeguarding Bank Loans. The Journal of Accountancy, Dec. 1910, p. 97.
- 2) 喜田義雄著『アメリカ監査論一生成と発展』森山書店刊、昭和48年、6～10頁。
- 3) コールの著書と出版年は次の通りである。
〔1〕Accounts, Their Construction and Interpretation, (1908.) 1915.
〔2〕Accounting and Auditing, 1910.
〔3〕The Fundamentals of Accounting, 1921.
コールはこれら四冊の著書の中で一貫して「計算表」を提唱し続けた。特に本小稿では、主として、〔1〕と〔2〕を考察の対象とした。なお以下の引用注には著書を省略し、番号を付した。
- 4) 〔1〕, p. 127.

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

3

5) [2], p. 331.

2. 「現況」と「変化」

コールは会計を次のように定義する。

「会計は企業に関する真実 truth の認識と伝達のために運用される、純化された常識 sublimated common sense 以外のなものでもない。」¹⁾ (傍点注・中村)

ここにみる「純化された常識」²⁾ なる言葉は、メイ (G.O.May) やリトルトン・ジンマーマン (A.C.Littleton and V.K. Zimmerman) の言葉、「経験からの蒸留」³⁾ distillation of experience と同義語である。かかる言葉の具体的説明は、デューイ (John Dewey) が科学のテーマと手続を次のように言及する中に見出すことができる。

「(一)科学のテーマと手続は、常識の、すなわち実際的な利用と享受の直接的な問題と方法から生じ、(二)常識の支配していた内容と作用を極度に洗練し、広げ、自由にするような仕方、常識に働きかける。」

すなわち、コールは、会計方法論を構築するにあたって、そしてその科学性を主張するにあたって、当時多くの知識人に影響を与えたといわれている⁴⁾、プラグマティズム Pragmatism に同じく影響を受けた。そのことは、コールの会計目的と方法の具体的説明に顕現されている。特にプラグマティズムの最初の普及者といわれ⁵⁾、そして氏と同じハーバード大学で哲学科の主任教授として在職経験のあった、ジェイムズ (William James)

4

阪南論集 第13巻第2号

の「意識の流れ」の姿の描写と比較すれば、そのことが明らかにされる。

さて、ジェイムズは、鳥の生活と対比させ、「意識の流れ」の姿を次のように描写する。

「意識は、水の流れと同じく、切れ目なくつながっているものだ。また、意識は、時々刻々、変化している。……(略)……意識はちょうど鳥の生活の如く、飛行と停止との交替のように見える。……(略)……この停止の部分を、意識の流れの『実質的部分』と称し、飛行の部分を、『推移的部分』と言う。今までの学派のアヤマリは、『実質的部分』を強調して、あたかもこれのみによって、意識が構成されているように見た事にある。意識の対象は、常に『縁』(fringe)をもっている。それはこれから来ようとする状態への予期的傾向である。」⁶⁾
(傍点注・中村)

つまり、ジェイムズは、後にリトルトン・ジンマーマンが共著の副題に使用した概念、「連続と変化」continuiting and change に注視することはいかえれば、「時間的要素」(「時間」概念)を考慮に入れることを主張した。そして、後にリトルトンが会計史研究の中で具体化した「変化」概念⁷⁾を、ジェイムズは次のように言及する。

「“変化”という概念は、常に不動な概念である。たとえその概念が変化したとしても、もとの概念はなおもとの変化の前にあったものをさし示しつづけるだろう。しかも、その場合でも変化はやはり知覚される連続的な過程であるだろう。」⁸⁾ (傍点注・中村)

他方コールは、時点から時点への経過いかえれば、変化に注視し、会計目的と方法を次のように言及する。

「会計の目的は、財産における変化を記録するだけでなく、これらの変化を説明することにある。」⁹⁾ そのためには、「会計解明の最善な方法はまず企業の報告書を……手に入れることにある。そして、われわれは行間を読むこと to read between the lines に努めなければならない。たとえば、なぜある資産が当期中に増減したのか。……(略)……いかなる方法で資産が増減したり、負債が増加したりしたのか、それらを考察する必要がある。」¹⁰⁾ したがって、「われわれはある情報を他のいかなる情報とも関係なく、貸借対照表から作成することができる。しかしこのような計算書を考察する場合には、われわれは現況を知ることよりもむしろ経過 the course of things を知ることに関心を向ける。われわれは、貸借対照表の比較から、企業の明瞭な傾向を知ることができる。」¹¹⁾ (傍点注・中村)

以上の考察から明らかなように、コールはプラグマティズム、ここでは特にジェイムズの「時間」概念の導入に影響された。その結果、氏はゴイング・コンサーン(「時間」概念の導入要因)としての企業の活動を次の観点から考察することを意図した。それは「現況」(実質的部分)と「変化」(推移的部分)・「動向」である。すなわち、氏は、前者を貸借対照表で表示し、後者を「計算表」で表示することを意図した。かかる貸借対照表と「計算表」の関係の成立から、氏の「計算表」の理論さらにはその後の資金計算書の理論に関し、重要な基本的要素が成立するのを見る。それらは、(一)変化の結果を認識するために資する比較貸借対照表と(二)その結果の原因の説明に資する「計算表」の理論的根拠である。さらに注目すべきは、上の関係から、「計算表」が連続せる貸借対照表を連結する働きにあることが明らかであるということにある。この点に関し、氏はなんら明記していないので、氏がこのことを認識していたかどうかは不明である。しかし、上の関係から導き出される、その論理的帰結として、そのことは

十分に成立するだろう。そして、かかる連結機能は、APB意見書第19号にみる、「財政状態変動計算書」Statement of Changes in Financial Position の機能に見出すことができる。¹²⁾

- 1) [1], 序
- 2) メイは1943年刊の『Financial Accounting』の副題に「A Distillation of Experience」なる言葉を使用し、リトルトン・ジンマーマンは、共著『Accounting Theory : Continuity and Change』の中で、次のように言及する。すなわち「会計理論は、もともと経験から蒸留された濃縮物である。」(A. C. Littleton and V. K. Zimmerman, *ibid.*, p. 10. 上田雅通訳『会計理論—連続と変化』阪南大学翻訳叢書3, 税務経理協会刊, 昭和51年, 16頁)
- 3) 上山春平編『世界の名著48, パース, ジェイムズ, デューイ』中央公論社刊, 昭和47年, 454—455頁。
- 4・5) 上山春平著『弁証法の系譜』未来社刊, 1970年, 126頁。
- 6) 鶴見俊輔著『新版アメリカ哲学』社会思想社刊, 昭和46年, 83—84頁。
ジェイムズ(1842—1910)は、1898年にはハーバード大学の哲学科の主任教授として在職中であった。代表作『プラグマティズム』は、コールが最初の著を刊行した前年の1907年に刊行された。他方コールはハーバード大学で学び、卒業後ハーバード大学に奉職した。1908年の経営学部増設に伴い、経済学部から経営学部へ移り、助教授になったといわれている(参考文献: 上山春平編前掲書, 鶴見俊輔著前掲書, G. Previt, A Critical Evolution of Comparative Financial Accounting Thought in America 1900 to 1920, 1972, Dissertation for the Degree Doctor of The Florida University.)
- 7) リトルトンは次のように言及する。すなわち、「会計の歴史についてもまた、普通の歴史にみるように物語の底には事件の相互関連性が流れているのであり、変化ということがそこでも永遠に続くエレメントなのである。」(A. C. Littleton, 『Accounting Evolution To 1900』, 1933(1966). preface. 片野一郎訳『リトルトン会計発達史』同文館刊, 昭和42年, 序2.) かかる歴史観が、その後のジンマーマンとの共著の副題「連続と変化」として、顕現したのである。

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

7

- 8) 上山春平編前掲書, 309頁。
- 9) [1], p. 65.
- 10) [2], p. 9.
- 11) *ibid.*, p. 331.
- 12) 拙稿「A P B意見書 第19号の資金計算書の考察」, 『阪南論集』第11巻第5号, 45-61頁, 参照。

3. Where-got · where-gone 表

それでは, かかる「計算表」は, いかなる変化(目的)を, いかなる方法で説明(分析)するのだろうか。以下, 順次に考察をすすめたい。

まず「目的」であるが, それは, 貸借対照表と「計算表」の関係から, 貸借対照表の目的に規定される。かかる貸借対照表の目的が究極的には債務返済能力表示にあると次のように言及する。

「貸借対照表の目的は, 企業の財産額あるいは企業の債務返済能力を表示することにある。すなわち, どの程度に企業の財産額が企業に対する請求権を超過しているかを, 貸借対照表は表示することにある。」¹⁾

したがって, 「計算表」の目的は 貸借対照表に示される債務返済能力の変化を説明することになる。²⁾

それでは, いかなる方法で, 「計算表」は債務返済能力の変化を説明するのだろうか。それは, 「計算表」の作成原理の考察を通して, 明らかになるだろう。まずその作成原理が顕現するとみられる「計算表」の構造は次の通り要約される。

そこでは(資料 I ・参照), 比較貸借対照表から認識されるすべての貸借対照表勘定科目の純変化が, 一方では資産勘定の減少と負債勘定の増加

8

阪南論集 第13巻第2号

(資料 I) Comparative Balance Sheets, Dec. 31.

Assets	1905	1906	1907
Real Estate and Plant	275,000	420,000	400,000
Bills Receivable	8,000	60,000	55,000
Accounts Receivable	2,000	10,000	5,000
Supplies	15,000	5,000	5,000
Cash	300,000	40,000	20,000
Merchandise		105,000	125,000
Depreciation Fund			20,000
Reserve Fund			20,000
	600,000	640,000	650,000

Liabilities	1905	1906	1907
Capital Stock	500,000	500,000	600,000
Bills Payable	100,000	100,000	
Accounts Payable		20,000	10,000
Reserve			20,000
Profit and Loss		20,000	20,000
	600,000	640,000	650,000

Summary of Transactions as shown from the Balance Sheets

Where got (or Receipts or Credits)	Where gone (or Expenditures or Debits)
1906	
Supplies	Real estate and plant
- 10,000	+145,000
Cash	Bills receivable
-260,000	+ 52,000
Accounts payable	Accounts receivable
+ 20,000	+ 8,000
Profit and loss	Merchandise
+ 20,000	+105,000
310,000	310,000

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

9

1907			
Real estate and plant	- 20,000	Merchandise	+ 20,000
Bills receivable	- 5,000	Depreciation fund	+ 20,000
Accounts receivable	- 5,000	Reserve fund	+ 20,000
Cash	- 20,000	Bills payable	-100,000
Capital stock	+100,000	Accounts payable	- 10,000
Reserve fund	+ 20,000		
	170,000		170,000

(資料II) Summary of Transactions for the Year (1910年)

Utilization of Resources		Disposition of Assets	
Investments, decrease	\$ 2,000	Real estate, increase	\$ 2,000
Bills receivable, decrease	5,000	Plant and machinery, increase	1,000
Bonds, increase	2,000	Customers, increase	3,000
Bills payable, increase	5,460	Merchandise, increase	4,000
Interest accrued, increase	40	Deficit, increase	2,500
		Creditors, decrease	2,000
	\$ 14,500		\$ 14,500

Summary of Balance-Sheet Changes (1921年)

Application of values		Source of values	
Merchandise(+)	\$ 29,000	Cash(-)	\$ 6,500
Accounts Receivable(+)	42,000	Allowance for Discounts Available(-)	500
Raw Material(+)	10,000	Fixtures(-)	1,000
Good--in Process(+)	10,000	Allowance for Bad Debts(+)	1,000
Real Estate(+)	10,000	Allowance for Discounts Offered(+)	1,000
Accounts Payable(-)	16,000	Allowance for Depreciation(+)	5,000
Notes Payable(-)	16,000	Provision for Fire Hazard(+)	5,000
Accrued Liabilities(-)	6,000	Capital Stock(+)	50,000
		Surplus(+)	69,000
	\$ 139,000		\$ 139,000

10

阪南論集 第13巻第2号

に、他方では資産勘定の増加と負債勘定の減少に、二分類される。そして、前者が「Where-got」あるいは Receipts (資金の源泉) として、後者が「Where-gone」あるいは Expenditure (資金の使途) として、両者が等式表示される³⁾。

そこで問題は、(一)すべての貸借対照表勘定科目(以下、諸勘定科目と略称)の純変化が「Where-got」と「Where-gone」に分類される基準と、(二)そのように分類された両者が等式表示される根拠が、それぞれいかなる方法で設定されているかにある。

これらの問題を明らかにするために、まずコールの複式簿記の説明から、考察をすすめたい。この点に関し、氏は次のように言及する。

「複式記帳は、各取引が二重に記帳 entered twice されることなく、各取引が二つの観点から一原因 cause と結果 effect あるいは源泉source と使途 destination の観点から、記帳されることを意味する。」⁴⁾そして「複式簿記では何ものもそれとの等価物 (equivalent) なしに増減しない。」⁵⁾

かかる複式簿記の理解を基礎に、さらに諸勘定科目の背後に「あるもの」 something の存在を仮定し、諸勘定科目の増減を、氏は次のように説明する。

資産勘定 resource account の減少は、あるものが当期中にこの勘定から引出され他のどこかへ支出されたことを示す。そして、負債勘定(資本勘定を含む)の増加は、企業がある種の財産を借り、その結果、同等額の支払手段をもったことを示す。反面、資産勘定の増加は、あるものが増加した資産を獲得するために支出されたことを示す。そして、負債勘定の減少は、負債が返済されねばならないときに

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

11

は、あるものが支出されるに相違ないと理由から、資産勘定の増加と同じである。⁶⁾

要するに、諸勘定科目の純変化がその背後にある「あるもの」の動きを反映する。そして、その動きによって、諸勘定科目の純変化が先のように分類される。そのように分類された純変化、「Where-got」と「Where-gone」が等式表示される理由は、先の複式簿記の説明のところでも明らかなように、それらの純変化が「あるもの」を媒体として等価のもとで生起することにある。

以上の考察から、その作成原理の中に、氏の資金計算書的思考（以下、資金的思考と略称）が顕現されるのをみる。この点は、氏が具体的に「計算表」を次のように説明する中により明らかにされる。

「いいかえると変動として指示されたものが現在手許にあるとしてもそれはすぎさった年度中に資源として使用されたものではなく、その獲得のための支出の原因だったのである。われわれが表に示しているものは、取得したものと消費したものではなくて、その取得と消費の源泉と行先（使途・中村） the sources and distination of the getting and the spending である。先の表で『買掛金+20,000』を“where-got”に示していることは、買掛金が取得されたことを意味するのではなくて、この項目が他の側のあるものがどうして取得されたかの理由を説明していることを意味する。」⁷⁾（傍点注一中村）

そして、結論的には、氏は「計算表」から、債務返済能力の変化の分析を、次のように説明する。

「ある資産は常に善 good であるが、ある資産はときに悪 bad で

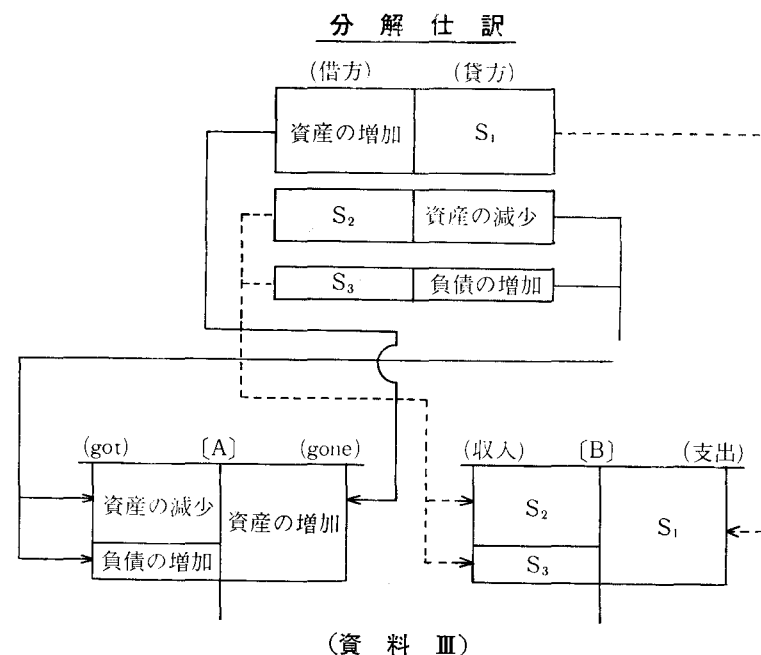
12

阪南論集 第13巻第2号

あり、少数はある資産は通常とも悪である。またある負債には不審 suspicious はないが、他のものにはしばしば不審がある。上記のようにその変動を示す一覧表は、ある善の資産がそれほど善でないものと交換されたかどうか、厄介な負債がそれほどきびしくない負債と交換されたかどうかを示している。たとえば現金の売掛金への交換は、ドルとドルとの交換だが（もちろんすべての他の項目が同一であるとして）ロスの確実なサインである。」⁸⁾

以上の考察から、図解（資料Ⅲ）を利用し、氏の「計算表」の作成原理、構造ならびに資金的思考を要約すれば、次の通りである。

資料Ⅲにおける分解仕訳は、比較貸借対照表から認識される諸勘定科目の純増減の相手勘定として、諸勘定科目の背後に存在すると仮定された



「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

13

「あるもの」(資料Ⅲでは S_1, S_2, S_3 と表現) を使用した。たとえば、(借方) 資産の増加 (貸方) S_1 という分解仕訳は、「あるもの」 S_1 が資産を獲得するために支出されたことを示す。コールの欠点は、各勘定の背後に「あるもの」の存在を仮定しながら、期中の個別取引に対して、上の分解仕訳を想定しなかったことにある。そして、バランス〔A〕表はコール自身の「計算表」に相当する。バランス〔B〕表は「あるもの」の源泉と用途を一覧的に表示したものである。

以上のことから、バランス〔A〕表はバランス〔B〕表を勘定科目によって表現した、いわばバランス〔B〕表の投影像であることが理解される。したがって、氏は「資金」fund 用語を使用しなかったけれども、氏が「あるもの」(something—1908, 1915年) から「資源」(resource—1910年) さらには「価値」(value—1921年) へと変化させた (資料Ⅰ・Ⅱ・参照)、一つの概念が資金概念に相当するものであることから、バランス〔A〕表が源初的な資金計算書形態であることが理解される。

要するに、氏の資金的思考は、「支払能力の財源となるべき資金が一会計期間中において、どのような源泉から調達され、それがどのような用途へ運用されているかという、その期間中における資金の流れをとおして、いわば動態的な支払能力の程度を考察しようとする。」⁹⁾ (傍点注・中村) ことにある。

1) [2], p. 315.

2) [1], p. 132.

3) *ibid.*, pp. 127—128.

4) *ibid.*, p. 14.

5) *ibid.*, p. 127.

6) *ibid.*, p. 132.

7) *ibid.*, pp. 129—130. 植野 郁太著『財務諸表論研究』中央 経済社刊, 昭和50年, 243頁。

8) *ibid.*, p. 132. 植野郁太著前掲書, 243頁。

14

阪南論集 第13巻第2号

9) 水田金一著『財務諸表分析』中央経済社刊, 昭年42年, 134頁。

4. ローゼンとデコスターの論評

さて、これまで考察を行なったコールの「計算表」に対し、今日まで多くの論者が論評を行なってきた。その中でも、ローゼンとデコスター (L. S. Rosen and Don T. DeCoster) は、貸借対照表との関連で、「計算表」の論評を行なっている。それは、「計算表」(特に目的) の理解にとって、興味ある問題を提示する。本節では、かかる両氏の論評の考察を通して、コールの「計算表」への理解を深めたい。

両氏は、まず(一)貸借対照表の目的と「計算表」の関係から、次のように論評する。

「コールの説明は、報告書が“一般債務返済能力”の変化を表示すべきなのか、“帳簿の信頼”に関する情報を表示すべきなのか、どちらにあるのか明示しなかった。」¹⁾

かかる両氏の論評は、コールが、一方では貸借対照表を次のように言及しながら (注2)、他方ではすでにみたように、「計算表」は債務返済能力の変化を説明することのみ主張することにすぎなかった、ことに起因する。

「貸借対照表は資産負債表と混同される。論理的には両者は同一物ではあるが、実際には通常そうとは限らない。貸借対照表は、企業の正確な状態 what is the exact of state of affairs (債務返済能力・中村) だけでなく、帳簿の正確な状況 what is the exact condition of the books (帳簿の信頼性・中村) を表示することにある。」²⁾

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

15

したがって、問題は帳簿の信頼性に関する情報と「計算表」との関係にある。この点を明らかにするためには、コールによる貸借対照表の帳簿信頼表示機能を見直す必要がある。そのとき、氏が貸借対照表は「帳簿を締切った後に作成された新しい試算表」であるとし、次のように言及することに注意しなければならない。

「試算表の目的は、その名が示すように、帳簿の正確さ accuracy を借方と貸方の一致の方法で検査することにある。さらにこの試算表は 6 桁計算表の基礎として使用される。けだし、それは帳簿が会計期末にいかなる状態にあるかを正確に示す。このことから、6 桁計算表の最初の二欄は試算表の写しである。次の二欄は資産と負債を示し、債務返済能力を示す。……(略)……。帳簿が締切られた後に作成される試算表は貸借対照表である。利益の処分による変動を除けば、それは 6 桁計算表の第三番目の二欄とまさに一致する。」³⁾

要するに、試算表が具備する複式簿記の自動的検証機能が貸借対照表に運用されている。その意味において、貸借対照表は独自に帳簿の信頼性に関する情報を提供する。したがって、コールは、「計算表」を作成する効果は債務返済能力の変化を説明することのみにあることを強調したと、理解される。

次に(二)債務返済能力と流動性に関連し、両氏は次のように論評する。

「コールの“資金”計算書は流動性の変化を十分に説明してはいない。それは単なる貸借対照表の純変化だけを表示するにすぎないのであって、少しも当期に生じた重要な取引に注視し、表示しない。」⁴⁾

かかる論評はコールに対する論評の中でももっとも一般的なものであ

16

阪南論集 第13巻第2号

る。それは、氏が「即時的な債務返済能力」immediate solvency という表現で流動性に関心を示し、貸借対照表の勘定科目分類は次のように調整されるべきであると指摘しながら(注5)、実際にはなんらの調整もなさなかったことに起因する。

「貸借対照表は、負債が即時的であり、資産が固定的であるという事実に関し、なんらのヒントも与えない。そのような貸借対照表は十分に満足するものではない。貸借対照表は、流動資産 quick assets と流動負債 current liabilities が比較可能なように、調整されるべきである。」⁵⁾ (傍点注・中村)

それでは、コールは何故に貸借対照表を自らそのように調整しなかったのであろうか。また何故に「計算表」をそれら特定項目に注視するように作成しなかったのであろうか。その理由として、次に挙げる三点を指摘することができる。

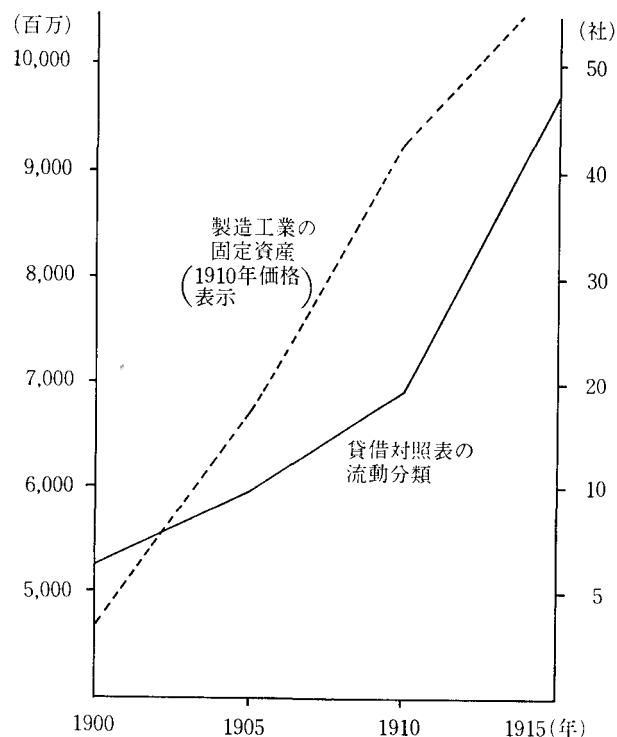
まず第一点は、利害関係者の要請が何であるかという判断にある。この点に関し、氏は次のように指摘する。すなわち、投資家・投機家も即時的な債務返済能力に関心を向けているが、彼ら以上に貸主がそれに関心を向けている。しかし、一般的には、投資家・投機家ならびに貸主いかえれば、貸借対照表を検討する人の関心は、「即時的な利用性よりも財産の実際最終価値に」、そして「資本項目に常に関心を向けている。」⁶⁾

かかる氏の判断は、次の諸状況が影響しているものと、推察することができる。すなわち、グラフ I⁷⁾ が示すように、固定資本の増大は1910年までに急増しているのに対し、貸借対照表における流動分類は除々にしか増加しておらず、それが一般に普及しているとは判断し難いこと。さらには、1903年と1907年の恐慌時における企業倒産による利害関係者(特に債権者)が打撃を受けたことである。

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

17

ー グ ラ フ ー



そして、第二点は、流動分類基準にみる見解の不一致である。すなわち、氏は、換金性基準を否定し、循環性基準を支持し、次のように言及する。

「貸借対照表における流動項目の本来の目的は、企業の通常の指揮において、企業の目的のために即座に手放すことのできる項目を示すように区別することであって、即時的な換金可能性を区別することではない。」⁸⁾

18

阪南論集 第13巻第2号

最後に、第三点は、先に考察を行なった、貸借対照表と「計算表」の関係である。すなわち、それはゴーイング・コンサーンとしての企業活動の「現況」と「変化」を表示する関係にあった。それ故、かかる「計算表」は連続せる貸借対照表（「現況」）を連結する役割を具備したことにある。

以上、三点の理由を挙げたのであるが、いいかえれば、貸借対照表中心思考における論理の一貫性と有用性が氏の基本的態度にあることに起因するといえるだろう。

しかし、ローゼンとデコスターの第二の論評点にある流動性への関心は、その後の実際界における流動分類（換金性基準によるもの）の普及ともなっており、コールからの脱却として、多くの論者によって、それへの修正が試みられた。そして、その結果、運転資本資金計算書が一潮流となった。しかし、氏は一貫して、「現況」と「変化」の関係から、かかる「計算表」を主唱し続けた。かかる氏の態度は、その後の論者が資金計算書を論ずる場合の有益な示唆を与えた。この点に関し、ケンプナー (Jack J. Kempner) は次のように評する。

「後世の人達は少なくとも、コールが混乱を避けようとしたことに感謝するだろう。コールが指向したものは、読者の注意を、資金そのものよりも、資金が創造された源泉と資金が運用された理由とに、向けるように指導することにある。」⁹⁾

- 1) L. S. Rosen and Don T. DeCoster, "Funds" Statements : A Historical Perspective. The Accounting Review, Jan. 1969. p. 127.
- 2) [2], p. 327.
- 3) [1], p. 53.
- 4) L. S. Rosen and Don T. De Coster, op. cit., p. 127.
- 5) [1], p. 138. コールは運転資本概念を認識しなかったわけではない。その認識は鉄道会計の考察の中にみられる。すなわち「鉄道会社は貯蔵品、現金等といったような、"運転資本" working capital として知ら

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

19

れているものの一定額を必要とする。」という。注目されるのは、コールはここでは「流動」を current 用語で表現し、後に示すように(注8)、流動性基準として、換金性基準にあることを指摘する。(ibid., p. 222.)

6) [2], p. 316.

7) 出所：製造工業の固定資本数値は、飯田貫一他訳『統恐慌の理論と歴史・上』青木書店刊、昭和45年、242頁。他方、年次報告書における貸借対照表の流動分類数値は、W. Huizingh, Working Capital Classification in Balance Sheets, 1963. Dissertation for the Degree Doctor of the Michigan University, pp. 197-203.

この流動分類数値は、ウイジングが、鉄道業10社、公益業7社、製造業88社、計105社の年次報告書を対象に行なった調査結果から作出した。この調査によれば、最初に公表会計諸表において流動分類を行なった会社は、1892年の Denver & Rio Grande Western Railroad 社であった。

8) [1], p. 318. さらに氏は1921年に明確に次のように言及する。すなわち「資産と負債の分類には、継続性基準 permanence と債務返済能力基準 solvency とがある。継続性における運転資本 working capital はただちに転換される形態の資産であって、……企業の継続を維持するに必要な資産を意味する。」([3], pp. 344-355)

5. おわりに

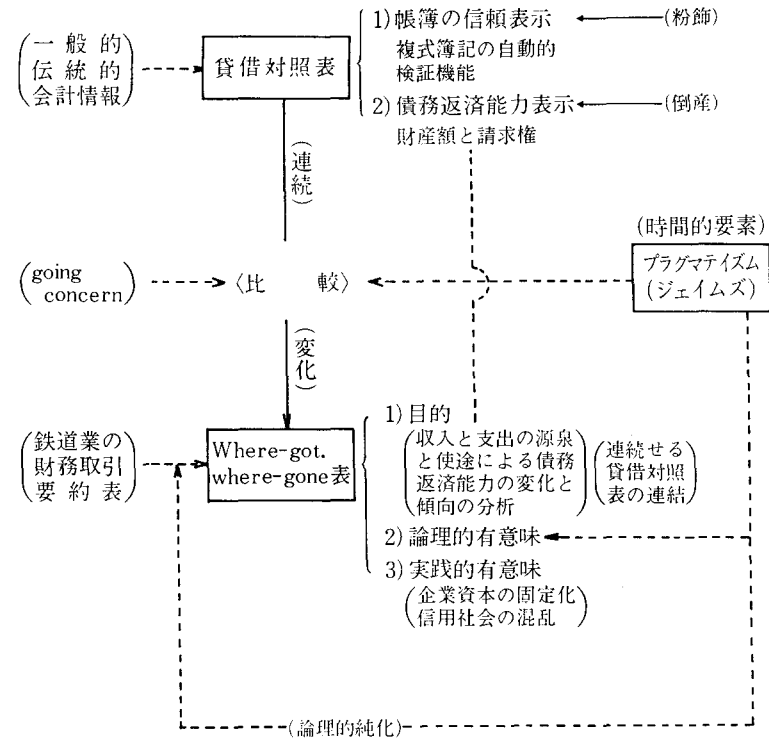
これまでの考察から明らかなように、コールの特徴は貸借対照表中心の思考の中に「時間」概念を導入したことにある。それ故、氏は「会計の目的が財産の変化を記録し、これらの変化を説明することにある。」という。ところで、変化の直接的誘因は「取引」にあるから¹⁾、氏は「会計は……企業取引の記録と科学的分析を行なうものである。」²⁾ともいう。かかる「取引」が、氏によれば、原因と結果か源泉と用途の観点から記録される。したがって、氏の貸借対照表分析は次のように要約される。

つまり、期間の取引によって生じた変化の結果は貸借対照表で分析される。それは時点の債務返済能力の判断に資す。そして、その変化の原因は

20

阪南論集 第13巻第2号

<資料 IV>



「計算表」で分析される。それは債務返済能力の変化を追跡し、上の債務返済能力の判断を補完する。ここにいう、結果と原因が「現況」と「変化」である。かかる「計算表」分析の中に、氏の資金的思考が顕現されているのをみた。それは、(一)債務返済能力の程度と傾向を動的に説明するとともに、(二)連続せる貸借対照表を連結するという、それらの目的を有する。(資料IV・参照)かかる氏の思考は、その後の資金計算書の理論に関し、ひとつの潮流となった。そして、その潮流は、1971年のAPB意見書第19

「コール (W. M. Cole) の資金計算書の理論」

21

号の中に流れ込み、他の運転資本資金計算書の潮流と合流し、大きな流れと化した。

- 1) 氏は1908年(1915年)には外部取引のみに限定していたが、1910年には、次のような変化を示している。すなわち「利益稼得活動を詳述するためのかかる計算書(「計算表」・中村)は、外部世界を取扱うことに限定されず、企業内の一部門から他部門への価値の移転を示すことを意図する。」(〔2〕, p. 335.)
- 2) 〔1〕, p. 4.